野鳥48種のカラー図鑑と
CDで聞くさえずり。(Part2)

構成 立松和平
イラストレーション 水谷高英
解説 松田道生(財・日本野鳥の会)

shufunotomo cd books 13

bird song 2

shufunotomo cd books 13

bird song 2

江苏工业学院图书馆
藏书章

構成 立松和平
イラストレーション 水谷高英
解説 松田道生(財・日本野鳥の会)

主婦の友社

立松和平（たてまつ・わへい）

1947年、宇都宮市生まれ。早大政経学部卒業。第1回早稲田文学新人賞（『自転車』）、第2回野間文芸新人賞（『遠雷』）、1986年「若い作家のためのロータス賞」（アジア・アフリカ作家会議より）受賞。「ニュースステーション」（テレビ朝日系）で"心と感動の旅"レポーターとしても活躍。

主な著書：『歓喜の市』（集英社）、『熱帯雨林』（新潮社）、『魂へのデッドヒート』（文藝春秋）、『春雷』（河出書房新社）、『性的黙示録』（トレヴィル）、『世紀末通りの人びと』（毎日新聞社）『ヤポネシアの旅』（主婦の友社）など多数

水谷高英（みずたに・たかひで）

1951年、岐阜県生まれ。武蔵野美術短期大学舞台美術科卒業。テレビ局に勤務ののち、フリーのイラストレーターになる。初期には幼児向け教育絵本を多く手がけるが、現在では趣味で始めた野鳥のイラストを中心に、自然保護をテーマとした、雑誌・広告などの仕事に多く携わる。

主な作品集：『bird Song』（主婦の友社）

松田道生（まつだ・みちお）

1950年、東京都生まれ。東邦大学理学部卒業。（財）日本鳥類保護連盟、フリーライターをへて、現在は（財）日本野鳥の会企画事業部企画室長。

主な著書：『bird Song』（主婦の友社）、『野鳥観察ハンドブック』（東洋館出版社）、『とんでるバードウォッチング』（文一総合出版）

shufunotomo cd books 13

bird song 2

平成2年5月22日——第1刷発行

編　者——主婦の友社
発行者——石川晴彦
発行所——㈱主婦の友社
〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9
電話　（編集）03－294－1129
（販売）03－294－1133
振替　東京2-87527番

印刷所——大日本印刷株式会社

ISBN4-07-935682-X

©SHUFUNOTOMO CO.,LTD. 1990 Printed in Japan

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。お買い求めの書店か本社へお申し出ください。

実用新案登録出願中
㈱主婦の友社・大日本印刷㈱共同開発

装丁・中森陽三　提坂則子
編集協力・（株）ウッドベル

1

スズメ

スズメ
(ハタオリドリ科)
TREE SPARROW
L　14.5cm

おなじみの野鳥。しかし、意外と姿や声をよく観察していないことに気がつく。姿で言えば、頭は栗色のことをすぐに思い出すが、顔のホクロがどこにあったか、思い出せない。また、足の色は何色だったろうか。すぐには答えられない。よく見ると背中から翼にかけては、こまかくて複雑な模様をしている。

声もよく言われるような「チュン、チュン」だけではない。とくに早春に聞かれる「チュクル、チュ」など、複雑な節回しの声は、カタカナで書くのは不可能。野外で聞いたとき、すぐにはスズメの名前が出てこないほどきれいに感じる。

スズメは、バードウォッチングの基本。この鳥を基準に大きさを覚える。警戒心の強いスズメが、庭に置いた餌台に来るようになったら、野鳥にとって安全だと認められた証。

道端で餌をついばむこの鳥を飛び立たせないように、歩くことを練習すれば、野鳥との距離を縮めることができる。

ツグミ
(ヒタキ科)
DUSKY THRUSH
L　24cm

この鳥が渡って来ると冬。葉の散りはじめた雑木林で、スズメより大きく、翼のレンガ色がきれいなこの鳥の姿を見る。都会でも晩秋の夜空、「ケスッ、ケスッ」と鳴きながら渡って行くのを聞く。ツグミの姿を見るたび、声を聞くごとに、感激する。というのは、この鳥が通ってくる北陸ではカスミ網による密猟があとをたたず、毎年推計で何百万羽も捕らえられている。だから東京で見られるツグミは、カスミ網にかからなかった鳥であり、思わずよかったね、と声をかけてしまう。

ツグミの仲間は皆、声がよい。クロツグミもアカハラも複雑で大きな声でさえずる。ところがツグミだけは、鳴かないので〝口をつぐむ〟が語源だ。たしかに日本にいる冬の間は、単純な声しか出さない。しかし五月頃、渡り遅れたツグミは、「ツリリ、ツリリ」という声を主体に、複雑で朗々とした声でさえずる。このころには待ち構えるカスミ網がないことを喜ぶかのようだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3

ムクドリ

ムクドリ♂
(ムクドリ科)
GRAY STARLING
L　24cm

浜田広介の童話、「椋鳥の夢」のおかげで、たいへんメルヘンチックな鳥に思われている。しかし、スズメより大きく太めの体は可愛くないし、体の色も全体に黒っぽく地味。どちらかといえば、田舎から出てきた〝お上りさん〟といったファッションである。声も「ギュル、ギュル」と単純で、色気がないことおびただしい。

だから、公園の芝生でノコノコと歩きながら餌をあさっているこの鳥を初めて見て、「えっ、これがムクドリなの」と、がっかりする女性も少なくない。

でもムクドリは、昔は水田の虫をとる鳥として大切にされた。この鳥を保護するために「ムクドリの千羽に一羽は毒がある」と流布させた江戸時代の学者がいたほどだ。一万羽だと危険が少ないし、百羽だと誰かが死なくては信じてもらえない。千羽という数字は真実味を帯びている。昔から鳥の保護には苦労したようだ。

オナガ
(カラス科)
AZURE-WINGED MAGPIE
L　37cm

空色の翼や尾、黒い頭といった粋なスタイルのわりに声が悪いのは、カラスの仲間だからと言えば納得してもらえる。多くは「リューイ」とか、濁った「ギューイ」という声を出す。一羽くらいならばよいが、群れで騒がれるとうるさいくらいだ。

しかし、春の暖かい日には「ピュッ」とか「ピーッ」という声を聞くことがある。たくさんの野鳥の声に混じって聞こえると、ベテランのバードウォッチャーでも、一瞬オナガの名前が出てこないほど可愛い声だ。この声は、春から夏に聞かれるので、雄が雌を呼ぶ声か、雌が雄に甘える声に違いない。

公園や郊外の丘陵地でごく普通に見られるオナガだが、西日本にはいない。おもに本州の中部、関東から北に分布している。だから、関西の鳥仲間が上京すると、とりあえず明治神宮につれて行って、この鳥を見せてやれば満足してもらえる。お金がかからなくて便利な野鳥である。

カケス
(カラス科)
JAY
L　33cm

英語でJAY。この鳥の鳴き声からきている。

冬枯れの林の中で、いやがおうでも侘しさをかもしだしてくれるのは、このカケスの声だ。生き物の気配が感じられない冬の林は、しんと静まりかえっている。そんな林の中から、「ジャー」というしゃがれたカケスの声が聞こえてくる。この声を聞くと、かじかんだ足元から、寒さがじーんとはい上がってくるように感じる。

カケスの大きさはハトくらい。警戒心が強いので、飛び去って行く後ろ姿を見ることが多い。この時、腰と翼の大きな白い部分と、翼のきれいなコバルト色が目に入るはずだ。姿のわりに声が悪いのは、カラスの仲間のせいだからである。しかし、カラスの仲間だけに頭はよく、獰猛(どうもう)だ。夏は小鳥の巣を襲い、卵を奪ったりもする。

冬の間は好物のどんぐりを主食とするが、このどんぐりをためておいて後で食べるという賢い行動も知られている。

ハシブトガラス
(カラス科)
JUNGLE CROW
L　56.5cm

カラスという名前の鳥はいない。では、あの黒くて大きな鳥は何かというと、ほとんどがハシブトガラスとハシボソガラスである。

名前のように、ハシブトガラスのほうがくちばしが太い。そして、額が出ている。ハシボソガラスは、くちばしが細くて額が出ていないので、シルエットでも区別できる。色が黒いのだから、シルエットも順光も関係ないのだが……。

声も違う。ハシブトガラスのほうが澄んだ声で「カア、カア」と聞こえる。ハシボソガラスは逆に「ガア、ガア」と濁る。

住んでいるところも違う。東京などの都会にいるのが、ハシブトガラス。比較的自然の多い郊外には、ハシボソガラスのほうが多い。

これからは、カラスを見たら「カラス！」と言わないで「ハシブトガラスだ」とか「ハシボソガラスだ」と言えば、気分はバードウォッチャー。友人知人が尊敬のまなざしを送ることだろう。

ハシボソガラス
(カラス科)
CARRION CROW
L 50cm

カラスには、ハシブトガラスとハシボソガラスがいることは、前に述べた。よく見ると姿も違うし、声も、住んでいるところも違う。

しかし、鳥には翼があるので、いないと思った鳥が出現することがある。都会でも、ときにはハシボソガラスのカゼをひいたようなダミ声を聞くことがある。それは、たいがい秋や春の渡りの季節だ。渡らないはずのカラスも、けっこう移動をしているようだ。

あるとき、ハシブトガラスが騒いでいるのでよく見ると、一羽のハシボソガラスを囲んでいじめていた。これも、秋のことだった。

カラスの声は縁起が悪いことになっている。地方では「カラス鳴きが変わると死人が出る」という言い伝えがあるほど。いつも聞いていたカラスではなく、違う種類のカラスが渡りの季節で来たのだろう。季節の変わり目は、人の死ぬことも多い。カラスにとっては、いい迷惑だ。

シマアオジ♂
(ホオジロ科)
YELLOW-BREASTED BUNTING
L 14cm

シマアオジの声を聞くと、北海道を思い出す。それも札幌などという開けたところではなく、オホーツクに面した道東の原生花園や湿原である。ハマナスやエゾスカシユリに止まってさえずるこの鳥の声を聞くと、北海道に来たなあという実感がわいてくる。

「ホーヒーホー、チョリチョリ」と、ひとつの音をていねいに区切って繰り返す。音色は金属的でいて伸び伸びしている。草原を渡る風に乗って軽やかに、どこまでも響いて行きそうだ。

青いオホーツクの海と緑の草原、赤いハマナスの花、そしてシマアオジの黄色。まさに北海道の夏を彩る野鳥である。

ちなみに、この鳥は夏鳥で冬は東南アジアなどで過ごす。しかし、渡りの行き帰りに本州を通ることはない。どうやら、大陸経由でわざわざ遠回りをして北海道に渡って行く。この鳥に会いたかったら、どうしても北海道へ行かなくてはならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ノゴマ♂
(ヒタキ科)
SIBERIAN RUBYTHROAT
L 15.5cm

ノゴマも、シマアオジ同様、北海道の代表的な小鳥である。

同じように草原で生活しているので、姿もよく見るし、声もよく聞くことができる。「キョロリ、キョロリ、キーキョロ、キーチロリ」と聞こえる声量のある声は、シマアオジと甲乙つけがたい、いい声だ。それに、喉にある赤が、ハマナスの花の色に似て、北海道の夏のキラキラ輝く太陽を受けていっそう輝く。

たまたま手にしたこの鳥の死体を見て、なんと地味な鳥なのかと驚いたことがある。喉の赤色以外、全体は地味な茶色。他の色はない。しかし、北海道の草原で飛び回るノゴマは躍動感にあふれ、派手に感じてしまうのだろう。

ノゴマはシマアオジと違って、渡りの途中には、北海道以外でも姿を見ることができる。秋に、東京湾の埋立地のサンドパイプの上に止まるノゴマを見たことがある。キラッと輝いた喉の赤を忘れることができない。

コヨシキリ
(ヒタキ科)
BLACK-BROWED REED WARBLER
L 13.5cm

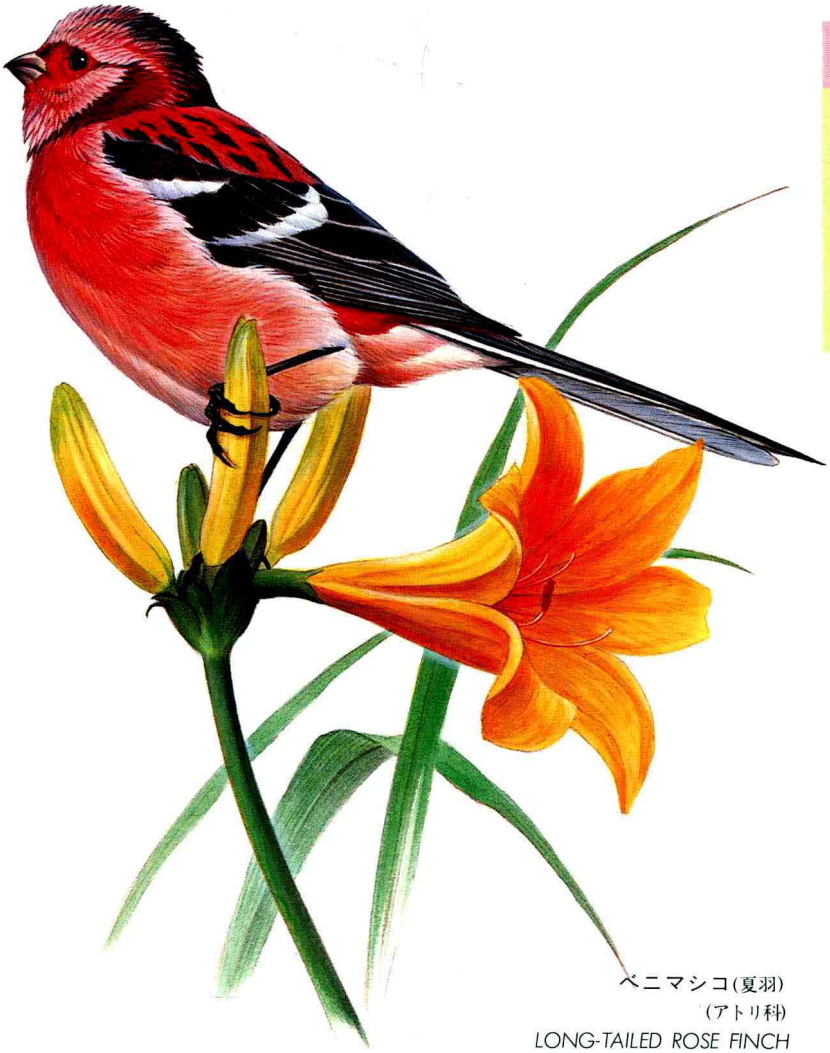
古来、ヨシキリは和歌や俳句に詠まれてきた。〝行々子〟といわれている鳥がそうである。しかしこれは、オオヨシキリのことで、鳴き声が「ギョギョシ」の繰り返しであるからだ。コヨシキリも、アシ原をすみかにすることや、ウグイスの仲間だけあって体の色が地味な茶色をしていることなど、オオヨシキリと共通点が多い。声も似ているが、小さいだけあってコヨシキリのほうが音が高く、金属的な響きを持っている。

違いといえば、コヨシキリはおもに本州では高原、北海道では平地の草原などで生活している。自然に対するえり好みがうるさいわけだ。霞ヶ浦の浮島やその周辺の潮来などでは、平地でもこの鳥を見ることができる。ときには、隣あったアシにオオヨシキリとコヨシキリが止まって合唱している。しかし、コヨシキリがオオヨシキリに追われる光景も見られ、少なくなったアシ原での生存競争のきびしさがうかがわれる。

エゾセンニュウ
(ヒタキ科)
GRAY'S GRASSHOPPER WARBLER
L 18cm

名前のように日本では北海道にしかいない。センニュウは、藪に潜んで姿を見せないこの鳥の仲間の習性が由来。ほかにマキノセンニュウ、シマセンニュウなどいるが、皆ウグイスの仲間だけあって、体の色はオリーブ色から茶色、地味なことおびただしい。野鳥の図鑑を見ると、どうやって区別をするのか不思議に思う。しかし、姿が似ているぶん、声はそれぞれ自己主張していて、一声聞けばわかる仕組みになっている。

特にこのエゾセンニュウは独特で、「テッペン、カケタカ」と聞こえる。それはホトトギスの声ではと、『bird song』をお持ちの方なら思われるだろう。たしかに、よく似ている。エゾセンニュウのほうがやや音が高いのと、つまずいたような節回しの違いがあるが、カタカナで書こうとすると同じになってしまう。ところで、北海道にはホトトギスは少ない。北海道では、エゾセンニュウがホトトギスのかわりを務めている。



ベニマシコ(夏羽)
(アトリ科)
LONG-TAILED ROSE FINCH
L　15cm

ベニマシコは愛らしい鳥だ。バードウォッチャーの中には、ファンが多い。友人にはこの鳥を一目見て、バードウォッチングのとりこになった者もいるほど。とにかく、小さな体に長めの尾、そして赤いおなか、短いくちばしに白い顔、つぶらな瞳が可愛い。この赤くてきれいなのは例によって雄なのだが、アイドルの美少女、といった感じだ。

夏、北海道や下北半島の平地の林で繁殖している。そこでは、ホオジロの声を短くしたような、より澄んだ声でさえずるのを聞くことができる。

冬には、全国でこの可愛い鳥に会うことができる。冬枯れの藪の中から「フィ、フィ」と柔らかくささやくような声が聞こえてくる。他の鳥の声が聞こえない静かな山あいの道、といったロケーションがこの鳥にはよく似合う。冬のやわらかい日の光を受けた胸の赤が、春の訪れが間近いことを教えてくれるかのようだ。

イカル
(アトリ科)
JAPANESE GROSBEAK
L　23cm

奈良の法隆寺のある斑鳩(いかるが)の里は、この鳥が多いことから名づけられたとも、斑鳩の里にいるのでこの鳥にイカルと名前がついたとも言われている。いずれにしても昔から親しまれてきた野鳥である。たぶん姿も声も、一度見たり聞いたりしたら忘れられないほど印象深いからだろう。

姿は不格好なほど大きくて、黄色のくちばしが目立つ。さえずりは「キヨコキー、キキーキヨココキィー」と、口笛で真似ができるほど単純。これをききなしでは「お菊、二十四」。女性には年がばれてしまう、いやな鳥である。また、晴れた日は「アケベコキー」これは「赤い着物(べ)を着よ」、雨の日は「ミノカサキー」これは「蓑傘(みのかさ)を着よ」と鳴くという地方もある。「月(つき)、日(ひ)、星(ほし)」とききなし、三光鳥と呼ぶ地方もある。これだけききなしのたくさんある鳥も珍しい。それだけ、聞く機会が多く、またはっきりした声でさえずるからだろう。

ツツドリ
(ホトトギス科)
ORIENTAL CUCKOO
L　32.5cm

カッコウやホトトギスの仲間は皆、姿形がよく似ている。しかし、よくしたもので声は皆違う。一度聞いたらすぐに覚えられる特有の声だからうれしい。

山の端が白っぽくなって、朝霧が流れて行く。初夏とはいえ、山の朝は寒いほど。そんなときにカラマツ林の中から聞こえてくるのがこのツツドリの声だ。「ポン、ポン、ポン」と一本調子だが、幻想的な気分にしてくれる。軽井沢あたりの俗っぽいところでも深山幽谷のムードにしてくれる。朝早くから鳴くのは、クロツグミやアカハラといった派手な声の持ち主が起きる前に鳴いておこう、と考えているからだろうか。

ツツドリのツツは、この鳥の声が筒を叩くように聞こえるところからついたものだ。単純な音の繰り返しは、たしかに筒や鼓を打つ音に聞こえないこともない。しかし、谷合いにこだまする声を聞くと、シンセサイザーのほうが、この鳥の声を出せそうだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com